

海気通信

11号

2016/11/6

発行

千葉市民
ギャラリー・いなげ

〒263-0034
千葉市稲毛区稲毛1-8-35
TEL: 043-248-8723
FAX: 043-242-0729
http://business4.plata.or.jp/g-inage/

陸に浮かぶ船「こじま」が見てきたもの

かつて千葉市美浜区高洲4丁目には大きな船が浮かんでいました。…なぜ団地の中に？右の写真は、昭和20年に長崎で海防艦（軍艦として造られた船です。当時の名前は志賀。まもなく戦後を迎え、米軍の連絡船として博多〜釜山を往復、次に気象観測船として太平洋へ出航、昭和29年には海上保安庁の巡視船となり名前も「こじま」に改名します。当時、高校生で「こじま」の母港、広島県呉市在住だった末永俊幸さんは、海上保安庁の練習船だった「こじま」に乗り、四国まで航海したことがあるそうです。その後「こじま」は、北朝鮮やソ連からの在留邦人の引上げ輸送、広島県で

謎…!?団地の真ん中に船



海洋巡視船だった船を改修し、海洋公民館として美浜区で活躍した「こじま」

の座礁船の遭難者救助にあたるなど、時代に応じ国内外の海で様々な役目を果たしてきました。

公民館になった船

昭和39年に海上保安庁での役目を終えると、呉市と千葉市によって、払い下げを巡る招致争いになり、画期的な活用案で千葉市が勝ちます。それは、かつて軍艦 巡視船だった船を、街の誰もが利用できる「海洋公民館こじま」にリニューアルするというのがその目的でした。そして昭和40年、ついに「こじま」が稲毛海岸にやって来ます。偶然にも呉から千葉に越してきた末永さんは愛貌を遂げた「こじま」との再会に心底驚いたそうです。

まずは海の上で開館



海洋少年団のカッター練習風景。背後に浮かぶ船が公民館になった「こじま」。開館当初はまだ海に浮かんでいた。(西川明氏提供)

昭和41年5月26日、「こじま」は右の写



操舵室を見学する家族(千葉市広報広聴課提供)

展示室、海洋関係の本が並ぶ資料室、広い講堂や映写室まであったようです。もちろん甲板にも出ることができ、はしやぎ回る子供たちの姿がよく見られたそうです。

船に泊まった子供たち



寝室の様子(千葉市広報広聴課提供)

また、「こじま」は見学だけでなく、なんと宿泊もでき、市内の多くの子供が経験しました。西川明さんによると、千葉市中央海洋少年団の子供たちは、活動拠点の「こじま」

に泊まり、巡視船時代からの備品を使って手旗信号や船に搭載されたカッターポート漕ぎの練習をしたそうです。船内には2段ベッドの並ぶ寝室がいくつかあり、子供たちは慣れない狭いベッドで眠ったそうです。

また、昭和50年に8歳で稲毛に越してきた伊豆平成さんは、千葉おやこ劇場の夏のキャンプで宿泊。初めての船に興味津々で狭い通路を探検したそうです。夕食はもちろん船内の厨房で自炊でした。

公民館、ついに陸に上がる

では、一体いづどのようにして最初の写真のように陸に浮かぶ船になったのでしょうか？昭和42年、「こじま」が停泊していた稲毛の海はさらに2km先まで埋め立てられました。そこで、なんと「こじま」は元あった位置のまま、周囲を埋め立てられたのです。船の周りには、浅い池が造られ、陸に上がった後も船内へは棧橋で渡ったそうです。

残したいシンボルの記憶

「こじま」は美浜区の人たちにとって神社仏閣のような街のシンボルになっていました。しかし、平成5年、建築基準法などに適応しないことから休館し、平成9年には閉館してしまいます。解体が決まると稲毛海岸通り商店街を中心とする「文化遺産こじまを保存する会」が結成され、保存活動も行われますが、翌年に解体開始。幼少期から「こじま」の近所在住だった同会の彦坂徹さんは解体作業中、掘られた土に貝殻が混ざっているのを見て、当時そこが海だったと再認識したそうです。船無き後も「こじまを保存する会」は継続され、「こじま」の記憶の保存・発信に力を入れています。さらに「こじま」の記憶を若者に伝える「ちば素敵艦隊」なる会も生まれ、同会の東健二さんは「こじま」のラジコンを自作し、イベントも開催しています。

軍艦として生まれ、数奇な運命を辿った「こじま」が最も長く過ごした千葉での30年、子供たちの笑い声が響いた船の思い出はまだまだ街に眠っているはずですよ。

本頁は、東健二さんちば素敵艦隊、伊豆平成さん小説家、末永俊幸さん稲毛お話し会参加、西川明さん元千葉市史編さん委員、彦坂徹さん文化遺産こじまを保存する会のお話を参考に編集しました。ご協力どうもありがとうございました。



東さん制作のこじま模型